

# 上代における漢語「忽」の副詞的用法と和語「たちまちに」

岡野 恵

## 一、はじめに

加藤他(一九九六)は、方言と古語のかかわりについて「方言に古語が残るということは古くから注目され、すでに鎌倉時代の歌論書などでも指摘されている(九頁)」と述べている。また、「古代語が化石のように残っているのでもなく(中略)方言である以上、地方人の生活の中で長い間使われてきたのであ(十一頁)」り、「古語が新しい変形を生み、新しい意味やニュアンスを生み出しながら生きている(十二頁)」と記している。つまり、方言を研究していく上で、考察対象となる語がかつてどのような意味を持っていたのか、どのような意味の変化が生じたのかを調べることは重要である。

現在副詞「たちまち」は、次の(一)のように「非常に短い時間」で何かが発生することを表す際に使用された

り、(二)のように「さしあたって」という意味で使用されたりする。このうち、(一)は共通語として、(二)は方言として用いられている用例である。なお、用例中の下線は稿者によるものである。本稿における他の用例中の下線も同様である。

(一) 経済基盤の弱体なイタリアは、恐慌によって  
たちまちゆきづまった。(『詳説世界史』山川出版 二〇〇六)

(二) たちまちこれだけは用意できた。(さしあ  
たってこれだけは用意できたよ。)(『ひろしまのおもしろ方言』二〇〇〇 五十九頁)

このように、現在では「たちまち」には広く共通語として使用される用法と使用地域の限定された方言としての

用法が存在する。では、これらの用法はどのようにして現代語におけるそれぞれの位相を確立していったのであろうか。本稿ではこのことを明らかにするための出発点として、現在「たちまち」の漢字表記として使用されることのある漢字「忽」を含む漢語が上代において副詞として用いられる際にどのような意味で使用されていたのかを明らかにする。また、『万葉集』の和歌の中で用いられている和語「たちまち」についてもどのように使用されていたのかを明らかにする。

## 二、『古事記』における漢語「忽」「倏忽」

江戸時代後期、本居宣長により記されたとされる『訂正古訓古事記』の中には「タチマチ」「タチマチニ」という訓が添えられている漢語が全部で五例存在する。これらの漢語は「忽」「倏忽」の二種類に分けられる。「忽」は三例、「倏忽」は二例存在した。以下の(三)―(五)は「忽」、(六)―(七)は「倏忽」の例に相当する。

(三) 乃將―來其矢、置於床邊、忽成麗壯夫(『古事記』中卷)

(四) 爾少女答曰、吾勿言。唯爲詠歌耳。即不見其

所如而忽失(『古事記』中卷)

(五) 是以欲刺御頸、雖三度擧、哀情忽起、不得―刺頸而、泣淚落―沾於御面(『古事記』中卷)

(六) 此謂意富多泥古人、所―以知神子者、上所云活玉依毘賣、其容姿端正。於是有壯夫、其形姿威儀、於時無比、夜半之時、倏忽到來(『古事記』中卷)

(七) 即衣中服甲、取―佩弓矢、乘馬出行、倏忽之間、自馬往雙、拔矢射―落其忍齒王乃亦切其身、入於馬楯、與土等埋(『古事記』下卷)

まず、「忽」「倏忽」と訓との関係について見ていく。「忽」が用いられた(三)―(五)はいずれも「タチマチニ」という訓が添えられていた。また、「倏忽」が用いられた(六)―(七)については、(七)は(三)―(五)と同様「タチマチニ」という訓が添えられていたが、(六)は「タチマチ」という訓が添えられていた。従って、これらの言語事実により、『訂正古訓古事記』の出版された江戸後期においては、現在は通常助詞「に」を添えない「たちまち」が、「に」を添えた「たちまちに」という形で使用されることがあったことがうかがえる。また、「ニ」の有無

と「忽」「倏忽」との対応関係については、この五例からは特別な法則は見出せなかった。

次に、「忽」「倏忽」の意味について見ていく。(三) — (七)の「忽」「倏忽」の意味はいずれも①ある事態から次の事態が生じるまでの時間がきわめて短いさま、ある事態が発生してから終了するまでの時間がきわめて短いさまを表している。具体的に示すと、(三)の「忽」は矢を床に置いてから矢が麗しい男になるまでの時間がきわめて短いさまを表している。(四)の「忽」は、少女が答えてから少女の姿が消えるまでの時間がきわめて短いさまを表している。(五)の「忽」は八鹽折の紐小刀を三度振りかざしてから哀情の心が起こるまでの時間がきわめて短いさまを表している。(六)の「倏忽」は意富多多泥古人が活玉依毘賣のもとに訪れるまでの時間がきわめて短いさまを表している。(七)の「倏忽之間」は馬を忍齒王の馬と並んで走らせてから、矢を抜いて忍齒王を射落とすその身を切つて馬槽に入れて土に埋めるまでの時間がきわめて短いさまを表している。

また、「忽」の用いられている(三) — (五)については、「忽」が修飾する句の前の句が表す出来事と「忽」が修飾する句が表す出来事との時間がきわめて短いさまを表

しているのに対し、「倏忽」の用いられている(六)(七)では「倏忽」「倏忽之間」が修飾する句の表す出来事の開始から終了までがきわめて短いことを表している。さらに(三) — (六)の「忽」「倏忽」については①だけでなく、②ある出来事が予期せず突然発生するさまを表していると解釈することもできる。具体的に示すと、(三)の「忽」は矢を床に置くと矢が麗しい男になるという出来事が予期せず突然発生するさまを表している。(四)の「忽」は、少女の姿が消えるという出来事が予期せず突然発生するさまを表している。(五)の「忽」は八鹽折の紐小刀を三度振りかざしたが哀情の心が起こるという出来事が予期せず突然発生するさまを表している。(六)の「倏忽」は意富多多泥古人が活玉依毘賣のもとに訪れるという出来事が予期せず突然発生するさまを表している。

最後に、(三) — (七)の「忽」「倏忽」がどのような事態と共起するのかについて見ると、いずれも語り手の視点から描写された出来事を表す句の中で使用されていた。また、その出来事には(三) — (六)のように主体の状態変化を表すものと、(七)のように主体の他者への働きかけを表すものが存在した。

以上が『訂正古訓古事記』において「タチマチ」「タチ

マチニ」の訓が添えられていた「忽」「倏忽」の用法である。『訂正古訓古事記』に存在する「忽」「倏忽」の中にはこれらの訓の他に「ニハカニ」という訓が添えられているもの二例と、何の訓も添えられていないもの一例が存在した。次の(八)は「忽」に「ニハカニ」の訓が添えられているもの、(九)は「倏忽」に「ニハカニ」の訓が添えられているもの、(十)は「忽」に訓の添えられていないものである。

(八) 今日留此間而、先給大臣位、明日上幸、留其

山口、即造假宮、忽爲豐樂、乃於其隼人賜大臣位、

百官令拜、隼人歡喜、以爲遂志(『古事記』下

卷)

(九) 故、神倭伊波禮毘古命、從其地廻幸、到熊野

村之時、大熊髮出入即失。爾神倭伊波禮毘古命、

倏忽爲遠延、及御軍皆遠延而伏(『古事記』中

卷)

(十) 然、天時未臻、蟬一蛻於南山、人事共給、虎一

歩於東國。皇輿忽駕、凌一渡山川(『古事記』上

卷)

これらの「忽」「倏忽」はいずれも(三)―(七)と同様①ある事態から次の事態が生じるまでの時間がきわめて短いさま、ある事態が発生してから終了するまでの時間がきわめて短いさまを表すものとして解釈できるとともに、(三)―(六)と同様②ある出来事が予期せず突然発生するさまを表しているとして解釈することができる。なお、『古事記』に見られる「忽」「倏忽」の①や②の用法は漢籍にも見られる。次の(十一)―(十三)がこれに相当する。

(十一) 涼風忽至、草木成實(『列子・湯問』)

(十二) 忽奔走以先後兮 及前王之踵武(『楚辭・離

騷』)

(十三) 〔黃雀〕晝游乎茂樹、夕調乎酸醎、倏忽之間

墜於公子氏之手(『戰國策・楚策四』)

従って、『古事記』の中の「忽」「倏忽」の①②の用法は漢籍の用法に準じたものであると見ることができ。

以上、『古事記』における「忽」「倏忽」の副詞的用法を見てきた。次に『日本書紀』において「忽」を含む漢語の副詞的用法について見ていく。

三、『日本書紀』における漢語「忽」「忽然」  
「儻忽」

『天理図書館所蔵卜部兼右本日本書紀』の中には「タチマチ」「タチマチニ」「タチマチニテ」という訓が添えられている漢語が全部で五例ある。

これらは「忽然」「儻忽」の二種類に分けられる。なお『集韻』によれば、「儻」は『訂正古訓古事記』に存在した「倏忽」の「倏」の本字にあたる。「忽然」「儻忽」のうち、「忽然」は三例、「儻忽」は二例存在した。以下の(十四)―(十六)が「忽然」、(十七)―(十八)が「儻忽」の例に相当する。なお(十八)については「儻忽之間」全体に「タチマチ」という訓が添えられていた。

(十四) 于時、天皇適寐。忽然而寤之曰、予何長眠若此乎(『日本書紀』卷第三)

(十五) 連戰不能取勝。時忽然天陰而雨水(『日本書紀』卷第三)

(十六) 今吾輩人船數衆。忽然到彼、恐彼防人、驚駭射戰(『日本書紀』卷第二十七)

(十七) 君王恆暴強也。儻忽忿起、則朝見者夕被殺。

〔『日本書紀』卷第十三〕

(十八) 是夕觀覽、鉅野墳映、平原瀾進、人跡罕見、犬聲蔑聞。俄而儻忽之際、聞鼓之聲。(『日本書紀』卷第十九)

まず、「忽然」「儻忽」とこれらに添えられた訓との関係について見ていく。「忽然」が用いられた(十四)―(十六)はそれぞれ添えられた訓がやや異なっており、(十四)は「タチマチニテ」、(十五)は「タチマチニ」、(十六)は「タチマチ」という訓が添えられていた。また、「儻忽」「儻忽之際」が用いられた(十七)―(十八)は、ともに「タチマチ」という訓が添えられていた。従って、これらの言語事実により、『天理図書館所蔵卜部兼右本日本書紀』の浄書が終わったとされる天文九(一五四〇)年においては、現在は通常助詞の「に」「にて」を添えない「たちまち」が、「に」「にて」を添えた「たちまちに」「たちまちにて」という形で使用されることがあったことがうかがえる。また、「ニ」「ニテ」の有無と「忽然」「儻忽」「儻忽之際」との対応関係については、この五例からは特別な法則は見出せなかった。

次に「忽然」「儻忽」の意味について見ていく。(十

四) — (十八) の五例の「忽然」「儻忽」の意味はほぼ同様であり、いずれも「②ある出来事が予期せず突然発生するさま」を表している。『古事記』に存在した「①ある事態から次の事態が生じるまでの時間がきわめて短いさま、ある事態が発生してから終了するまでの時間がきわめて短いさま」を表す用例は存在しなかった。具体的に示すと、(十四)の「忽然」は天皇がよく寝ていると、目が覚めるという出来事が予期せず突然発生するさまを表している。(十五)の「忽然」は、日が陰り、氷雨が降るといふ出来事が予期せず突然発生するさまを表している。(十六)の「忽然」は、相手の地に到着するといふ出来事が予期せず突然発生するさまを表している。(十七)の「儻忽」は、王がお怒りになるという出来事が予期せず突然発生するさまを表している。(十八)の「儻忽之際」は、鼓の音が聞こえてくるという出来事が予期せず突然発生するさまを表している。

最後に、(十四) — (十八) の「忽然」「儻忽」「儻忽之際」がどのような事態と共起するのかわいて見ると、いずれも語り手の視点から描写された出来事を表す句の中で使用されていた。また、その出来事は主体の状態変化を表すものであった。

以上が、『天理図書館所蔵卜部兼右本日本書紀』における「タチマチ」「タチマチニ」「タチマチニテ」という訓が添えられている「忽然」「儻忽」の副詞的な用法である。『天理図書館所蔵卜部兼右本日本書紀』の中にはこれらの訓が添えられていない「忽然」が五例存在した。また、訓の添えられていなかった「忽」は四十八例存在した。次の(十九)は「忽」、(二十一)は「忽然」の用例に相当する。

(十九) 則見御船不進、惶懼之、忽作魚沼・鳥池、  
悉聚魚鳥(『日本書紀』卷八)

(二十) 黄牛負田器、將往田舍。黄牛忽失(『日本書紀』卷六)

(二十一) 虻疾飛來、嗜天皇臂。於是、蜻蛉忽然飛來、嚙虻將去(『日本書紀』卷十四)

(十九)の「忽」は「①ある事態から次の事態が生じるまでの時間がきわめて短いさま、ある事態が発生してから終了するまでの時間がきわめて短いさま」を表しており、(二十)(二十一)の「忽」「忽然」は(十四) — (十八)と同様「②ある出来事が予期せず突然発生するさま」を表していると解釈できる。他の「忽」「忽然」につ

いても調べたところ、「忽」は①の意味としてのみ解せるものや、①②のいずれとしても解釈できるものが存在した。一方、「忽然」については、①②のいずれの意味でも解釈できるものもあるが、ほとんどが②の意味で用いられており、①の意味で用いられているものは存在しなかった。なお、『日本書紀』に見られる「忽然」の②の用法は次の(二十二)のように漢籍にも見られる。

(二十二)〔長桑君〕乃悉取其禁方書盡與扁鵲。忽然不見、殆非人也。(『史記・扁鵲倉公列伝』)

以上、『日本書紀』における漢語「忽」「忽然」「儻忽」の副詞的な用法を見てきた。次に『万葉集』における漢語「忽」の副詞的用法並びに和語「たちまちに」の用法について見ていく。

#### 四、『万葉集』における漢語「忽」と和語「たちまちに」

『西本願寺本万葉集』の漢文体で書かれている目録、題詞、左注の中には「タチマチ」「タチマチニ」という訓が添えられている漢語の例は存在しなかった。しかし、『古

事記』や『日本書紀』と同様「忽」という漢語が副詞的に使用されている例は二十七例存在した。以下の(二十三)―(二十五)がそれに相当する。なお、「儻忽」「儻忽」「忽然」が副詞的に用いられている用例は存在しなかった。

(二十三) 若不扣寂含章、何以據道之趣。忽課短筆、聊勒四韻云尔(『万葉集』卷十七 七言、晚春三日遊覽一首の序)

(二十四) 以前天平二年庚午夏六月、帥大伴卿、忽生瘡脚、疾苦枕席(『万葉集』卷四 五六七左注)

(二十五) 直射對馬渡海。登時忽天暗冥、暴風交雨、竟無順風、沈沒海中焉(『万葉集』卷十六 三八六九左注)

(二十三)は「①ある事態から次の事態が生じるまでの時間がきわめて短いさま、ある事態が発生してから終了するまでの時間がきわめて短いさま」を表しており、(二十四)の「忽」は「②ある出来事が予期せず突然発生するさま」を表しており、(二十五)は①と②の両方の解

積ができる。具体的に示すと、(二十三)の「忽」は、「も  
しここで文章を作らなければ、何によつてふらふら歩き  
回った味わいを述べることができるだろうか、いや、でき  
ない」と思い至つてから、四韻を書き留めるまでの時間  
がきわめて短いさまを表している。(二十四)の「忽」は、  
大宰帥大伴旅人の脚に化膿性の腫れ物ができて、病床で苦  
しむという出来事が予期せず突然発生するさまを表して  
いる。(二十五)の「忽」は、空が暗くなつてから海に沈  
没するまでの時間がきわめて短いさまを表しているとい  
う解釈と、空が暗くなり、暴風が大雨と交ざつて吹き、と  
うとう順風を得ることなく海に沈没したという出来事が  
予期せず突然発生するさまを表しているという解釈がで  
きる。他の漢文体の文中で用いられた「忽」も、①②のい  
ずれかの意味を表すものや、①と②のいずれの意味でも解  
釈できるものであつた。

最後に、(二十三) — (二十五)の「忽」がどのような  
事態と共に起すのかについて見ると、(二十三)は、未来  
における主体の動作を表す句の中で使用されているのに  
対し、(二十四) (二十五)は、語り手の視点から描写され  
た出来事を表す句の中で使用されていた。また、その出来  
事は主体の動作を表していた。

以上、漢文体の文中で用いられた「忽」について見てき  
た。

次に、和歌における和語「たちまちに」の用法について  
見ていく。和歌の中には「たちまちに」の例として「頓」  
に「タチマチ」「タチマチニ」の訓が添えられているもの  
が二例存在した。以下の(二十六) (二十七)がその例に  
相当する。

(二十六) 玉篋小披余白雲之自箱出而常世邊棚引去

者立走叫袖振反側足受利四管頓情消失奴 (玉篋

少し開くに 白雲の 箱より出でて 常世邊

に 棚引きぬれば 立ち走り 叫び袖振り 反

側び 足ずりしつ つ たちまちに 情消失せぬ)

(『万葉集』卷九 一七四〇)

(二十七) 梓弓八多婆佐弥比米加夫良八多婆左弥宍

待跡吾居時余佐男鹿乃來立嘆久頓余吾可死王余

(梓弓 八つ手挟み ひめ鏑 八つ手挟み 鹿待

つと わが居る時に さを鹿の 來立ち嘆かく

たちまちに われは死ぬべし) (『万葉集』卷

十六 三八八五)



いずれの「頓」も長歌の中で用いられている。長歌は万葉集第二期柿本人麻呂に至って、五・七の音数を繰り返す形式が確立したことから、現代のような「に」を伴わない「たちまち」ではなく、「に」を伴う「たちまちに」という形で使われていたと考えられる。だが、「頓」の読みについては、先ほどあげた(二十六)では「頓」の後に「二」にあたる万葉仮名がなく、「頓」を「タチマチニ」と読ませているのに対し、(二十七)では「頓」の後に「二」にあたる「余」という万葉仮名があり、「頓」を「タチマチ」と読ませている。<sup>(三)</sup>すなわち「頓」の読み仮名としては、「タチマチニ」と「タチマチ」の二つが存在していたと考えられる。

次に、和歌の中で用いられている「たちまちに」の意味について見ていく。(二十六)(二十七)の「たちまちに」は「①ある事態から次の事態が生じるまでの時間がきわめて短いさま、ある事態が発生してから終了するまでの時間がきわめて短いさま」を表していると解釈できる。具体的に示すと(二十六)の「たちまちに」は、心が消え失せるという出来事が発生してから終了するまでの時間がきわめて短いさまを表している。また、(二十七)の「たちまちに」は、鹿が嘆いてから死ぬまでの時間がきわめて短

いさまを表している。さらに、(二十六)の「たちまちに」は、「②ある出来事が予期せず突然発生するさま」を表していると解釈することもできる。具体的に示すと、(二十六)は、心が消え失せるという出来事が予期せず突然発生するさまを表していると解釈することができる。

なお「たちまちに」の漢字として用いられた「頓」も次の(二十八)のように漢籍では「忽」の「①ある事態から次の事態が生じるまでの時間がきわめて短いさま、ある事態が発生してから終了するまでの時間がきわめて短いさま」と同様の意で用いられている。

(二十八) 攬營魂以探蹟、頓精爽於自求(『文賦』)

従って、和歌中の和語「たちまちに」に「頓」の字を用いたのは、和語「たちまちに」と漢語「頓」の意味が近似していたことによると考えられる。また、和歌で「忽」ではなく「頓」が用いられたのは、漢文体と和歌体の相違を意識してのことではないかと考えられる。

最後に、(二十六)(二十七)の「頓」がどのような事態と共起するののかについて見ると、(二十六)は語り手の視点から描写された出来事を表す句の中で使用されている

のに対し、(二十七)は未来における主体の状態変化を表す句の中で使用されていた。

以上、『西本願寺本萬葉集』の和歌の中で用いられた「頓」について見てきた。

## 五、まとめ

以上、現在「たちまち」の漢字表記として使用されることのある漢字「忽」を含む漢語が上代において副詞として用いられる際にどのような意味で使用されていたのかについて見てきた。これらの漢語は、漢籍と同様「①ある事態から次の事態が生じるまでの時間がきわめて短いさま、ある事態が発生してから終了するまでの時間がきわめて短いさま」や「②ある出来事が予期せず突然発生するさま」を表すのに用いられており、日本で新たに生じた用法は存在しなかった。また、『万葉集』の和歌に存在した「頓」の字が使用された「たちまち」も①の意味で使用されており、(二)のような現代語における方言としての「たちまち」の例は存在しなかった。さらに、「忽」を含む漢語ならびに和語「たちまちに」がどのような事態と共起するののかについて見ると、語り手の視点から描写された、主体の状態変化や、主体の他者への働きかけといっ

た出来事を表す句の中で使用されているものと、未来における主体の動作や状態変化を表す句の中で使用されているものが存在した。今後は今回の調査結果をもとに、中古以降の文学作品を通して「たちまち」の意味がどのように変化していくのか考察していく。

注

(一) 天文九年(一五四〇)十一月に浄書し終えたものである。神代卷二巻を欠く二十八巻が現存している。

(二) 観智院本の『類聚名義抄』には「頓」字に「ニハカニ」タチマチニの訓が見られる。

参考文献

- 伊藤博(一九九六)『萬葉集釋注』二 集英社  
伊藤博(一九九六)『萬葉集釋注』三 集英社  
伊藤博(一九九六)『萬葉集釋注』五 集英社  
伊藤博(一九九八)『萬葉集釋注』八 集英社  
伊藤博(一九九八)『萬葉集釋注』九 集英社  
伊藤博(一九九八)『萬葉集釋注』一〇 集英社  
加藤正信他(一九九六)『日本の方言と古語』南雲堂  
京都大学文学部国語学国文学研究室(一九七三)『天治本新撰字鏡(増訂版)』臨川書店

國民文庫刊行會編(一九二四)『國譯漢文大成』經子史部二十

國民文庫刊行會

- 小林信明（一九六七）『新釈漢文大系』二十二 明治書院  
 小林隆（二〇〇七）『ガイドブック方言調査』ひつじ書房  
 尚学図書編（一九八九）『日本方言大辞典』小学館  
 上代語辞典編修委員会（一九六七）『時代別国語大辞典 上代編』三省堂  
 鈴木恵（一九八〇）『日本靈異記古写本間に於ける「忽」「急」字の異同の成立』『国文学攷』八十八 一〇—二十三頁 広島大学国語国文学会  
 高橋顕志ほか（二〇〇三）『ガイドブック方言研究』ひつじ書房  
 築島裕解題（一九七五）『古辭書音義集成』六 汲古書院  
 築島裕解説（一九八四）『西本願寺本萬葉集』主婦の友社  
 天理図書館善本叢書和書之部編集委員会（一九八三）『天理図書館善本叢書和書之部』五十四 八木書店  
 天理図書館善本叢書和書之部編集委員会（一九八三）『天理図書館善本叢書和書之部』五十五 八木書店  
 天理図書館善本叢書和書之部編集委員会（一九八三）『天理図書館善本叢書和書之部』五十六 八木書店  
 日本国語大辞典第二版編集委員会 小学館国語辞典編集部（二〇〇一）『日本国語大辞典』小学館  
 日野資純編（一九八六）『日本の方言学』東京堂出版  
 平山輝男ほか編（一九九二）『現代日本語方言大辞典』明治書院  
 平山輝男編（一九九八）『広島県のことば』明治書院  
 広島県方言研究同好会（二〇〇〇）『ひろしまのおもしろ方言』松林社

- 福永光司ほか（一九七三）『中国古典文学大系』四 平凡社  
 星川清孝（一九七〇）『新釈漢文大系』三十四 明治書院  
 正宗敦夫校訂（一九七八）『類聚名義抄』風間書院  
 馬瀬良雄編（一九八六）『論集日本語研究』一〇 有精堂  
 目加田誠（一九六九）『中国古典文学大系』十五 平凡社  
 本居宣長（一八〇三）『訂正古訓古事記』上 皇都書林  
 本居宣長（一八〇三）『訂正古訓古事記』中 皇都書林  
 本居宣長（一八〇三）『訂正古訓古事記』下 皇都書林  
 羅竹風（二〇〇七）『漢語大詞典』上海辞書